



危機に直面する川魚

砂防ダムの影響 科学的検証を

ひえだ かずとし
神田 俊一



私は二十八年間、北海道の川で魚を撮影してきた。その川の様子が、どうもおかしい。

川底の石が泥を被り、砂がたまるとうになつて魚が減った。泥を被った石は指でこするとザラザラする。川底を長靴でほじれば泡煙が立ち上がる。石を持ち上げると、以前はたくさんついていたトビケラ、カワゲラ、カゲロウなど水生昆虫の幼虫が見当たらない。川底が下がって川岸が崩れ、農地や道路が崩壊する災害が頻発している。補修工事の結果、わき水や伏流水のある川底がコンクリートで固められ、川幅も二倍から三倍に広がった。

撮影を始めたころは、川水が雨で濁ることはなかった。十五年ほど前から、雨が降れば根っこが付いた倒木が川を流れ、泥水は沿岸に広がり、海が茶色に染まるようになった。

見回せば、どの川にも多くの治山・砂防のダムがある。道南でも、函館市南茅部地区の八木川には四十二基、渡島管内八雲町遊樂部川水系のポソトワルベツ川には二十五基のダムがある。

ダムは「大小の石をため込むもの」と思い込んでいたが、現場で見ると直径〇・一メートル以下の微細な砂泥が目立つ。その理由を考えていて、ダムが「流速を減らす」ことに気がついた。川を真横に仕切って水をため、こう配を水平に近づけて、流速を遅くするから微細な砂泥が沈殿するのだ。

ダムに沈殿した砂泥は増水時、巻き上がって下流へと流される。言い換えれば、ダムは普段から砂泥を集めておき、増水時にまとめて下流に流す「砂泥の集積装置」とも言える。

加えて、ダムが土砂をせき止めるために下流は著しく土砂が減って川底が下がり、川岸が崩れて樹木が倒れ、そこからまた砂泥が流れ出す。海が茶色に染まる理由が見えてきた。

魚や水生生物の卵は石の下や川底の奥深くで、わき水や伏流水などきれいな水にさらされて育つ。石のすき間に砂泥がたまれば、魚や水生生物の卵は成育できない。今、川の中はザクラマスやハナカシカなど、魚や水生生物が生存の危機に直面している。

砂防と生態の専門家により、ダムの影響と必要性を科学的に検証する必要があると思えてならない。

(写真家) 渡島管内八雲町

北海道新聞(二〇〇五年一月二十二日夕刊) から転載(北海道新聞社許可済)